

第10回生命科学における 核科学的分析法 (NAMLS10) 国際会議

海老原 充

Ebihara Mitsuru

はじめに

標記の国際会議が1月15~20日の間、タイのバンコク市で開催された。NAMLSはNuclear Analytical Methods for Life Sciencesの略称で、文字通り、生命科学に関わる核科学的分析法に関する国際学会であり、今回で10回目を迎えた。NAMLS国際会議の発足は1964年に遡り、ほぼ半世紀を経過している。第1回はオランダのデルフト大学で開催されているが、現在、同会議の国際委員会の委員長が同じデルフト大学のピーター・ボーデ氏であり、今回の会議の開催に当たっても、全面的に支援された。タイ側の主催団体の代表はタイ原子核研究所 (Thai Institute for Nuclear Science and Technology; TINT) のシリナート・ラオハロジャナバン氏が務めた。この会議がアジアで開催されるのは今回が初めてで、また、昨年秋の洪水のこともあり、一時開催の中止・延期も取りざたされたが、無事予定通り開催できたことは地域実行委員会 (LOC) としてのTINT関係者、及びNAMLS国際委員会の努力の賜である。なお、会議はタイ市内のスイスホテルで開催され、市の中心地に立地しながらも広い庭を持ち、周囲の喧噪から隔絶したその落ち着いた佇まいも会議成功に一役買っていたと思われる。

会議の概要

本会議名のLife Sciencesは非常に広い分野を包含し、その分野で利用されるNuclear Analytical Methodsも多種多様なものがあるこ

とから、会議のプログラムはかなり広い内容で構成されている。初日の15日は歓迎レセプションで、実質会議は16日から始まったが、17日は予定を変更してエクスカージョンに充てられた (残念ながら筆者は参加できなかったが)。最終日も午前中で終わったので、正味としては3日半で、この中で口頭発表53件、ポスター発表56件が行われた。会議には22か国から120人が参加した。会議の全容はNAMLS10のホームページ (<http://namls10.com/>) がまだ開設されているので、そちらを参照していただくとして、ここでは本会議に参加した日本人3人 (写真1) の発表を簡単に紹介したい。会議初日の午前中に「Fukushima and Nuclear Power」と題するオーラルセッションが組まれた。これは、東日本大震災で引き起こされた東京電力 (株) 福島第一原子力発電所の事故に関連する講



写真1 本会議に参加した日本人3人

演で構成されたもので、このセッションでお茶の水女子大学の古田悦子さんと広島大学の裕隆太さんの発表があった。古田さんの講演は「Imaging technique for detection of leaf surface contaminations with fission products scattered by Fukushima Nuclear Power Plants accident」と題するもので、原子力発電所の事故で放出された β 線と γ 線放出核種の飛散状況を、樹木の葉に沈着した放射性核種の量をイメージング手法を用いて検出することにより効果的に評価できることを示した。もう一つの裕さんの講演のタイトルは「Measurement of fallout with rain from Fukushima reactor accident in Hiroshima and several sites in Japan by low background HPGe spectrometer」で、東広島市をはじめ、福島県、関東地方、関西地方の数か所で採取した雨水中の放射性核種の放出する γ 線をGe半導体検出器で測定し、東広島市での放射能レベルは米国西海岸での値と同程度であったが、首都圏での値は厚生労働省の飲料水の暫定規制値を超える時もあったことを報告した。残る1件は筆者による「Elemental and isotopic characterization of Japanese and Philippine polished rice samples using instrumental neutron activation analysis and isotope ratio mass spectrometry」と題する講演で、農産物セッションで行われた。この発表はフィリピンの原子力研究所の研究者プレシオサ・パブリアさんたちとの共同研究によるもので、日本とフィリピンで流通する米（精米）の元素組成と炭素同位体組成の間にある相関があり、その相関は流通ルートに起因することが示唆されることを報告した。これらの発表はそれぞれのセッションで会議出席者の関心を大いに高め、様々な質問が寄せられた。中国からの参加者が目立った中で、日本からの出席者は、いわば孤軍奮闘したが、少数精鋭で、十分存在感を示せたのではないかと考えている。



写真2 会議終了時の記念撮影

終わりに

本会議は対象が生命科学ということから、筆者にとっては少し距離がある会議であるが、今回の会議は2つの意味で特別な機会であったことから、参加を決めた。その1つは、昨年の秋にタイを襲った洪水被害に対する励ましである。1年前の東日本大震災の際のタイから受けた支援・励ましに対する返礼という意味を込めて。もう1つは、これは個人的な理由であるが、主催責任者のシリナート氏とはFNCA（アジア原子力協力フォーラム）の中性子放射化分析プロジェクトを通しての長い付き合いがあり、今回の会議は彼女の退職を記念してという意味もあり、長年のFNCA活動に対する労いと、今回の国際学会を予定通り開催して無事に退職を迎えることに対するお祝いをしたい、という理由であった。新しい国際空港から市内まで専用高速鉄道が開通しているが、その沿線やバンコク市内では洪水の影響をほとんど認めなかった。会議も、一時は開催が危ぶまれたこともあったものの、成功裡に終わった（写真2）ことも大変嬉しく、無理を押して参加しただけのことはあったと思った会議であった。

（首都大学東京）